



堀田善衛
阿川弘之
遠藤周作
大江健三郎
集

現代文学大系 61



筑摩書房

現代文学大系 61 堀田善衛遠藤周作集

阿川弘之大江健三郎

昭和四十三年三月十日第一刷発行

著者 堀田善衛遠藤周作
阿川弘之大江健三郎

発行者 竹之内静雄

発行者 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

装幀 真鍋博

本文用紙 三菱製紙株式会社
表紙クロス 東洋クロス株式会社
本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 和田製本工業株式会社

堀田善衛集 目次

齒車

五

広場の孤独

五四

阿川弘之集 目次

雲の墓標

二九

遠藤周作集 目次

その前日

二三五

童話

二四三

私のもの

二五四

札の辻

二六五

四十歳の男

二五

帰郷

二九

ルーアンの夏

三〇

留学生

三三

大江健三郎集 目次

芽むしり 仔撃ち

三五

年譜

四六

人と文学

村松

剛

四四

堀田善衛集

しきかたの
ひかりのどけき
まゐるのひに
しづこころなく
はなあちらん

堀内善衛



齒 車

人はいう、なにゆえに作者はその人物をハンガリーに行かしたのか、と。率直に作者はこれを告白する。かりにわずかなりともかくすべき音楽的理由を見いだしたとすれば、作者は、他のいずこへなりとも登場人物を導いたであろう。

エクトール・ベルリオーズ
「フアウスト地獄」の序言より

一

終戦のあくる年、伊能は上海で中国がわのある機関に徴用された。それは表むきは××文化運動委員会ということになっていたが、つとめて少し時間がたつてみると、文化機関どころか、内実は学生や文化人の思想や動向を調査する査察機関で、おどろいたことには人を尋問し拉致拘禁する権能までもっているらしかった。そういう秘密警察的文化機関であった。そんなこととは知らずに、伊能がむしろ進んで徴用をうけたのは、ひとつには日本にたいし、徹底的な信念をもって抗戦に挺身した、いわば激しい精神の持

ち主に会ってみたい、政治というものが全体どのくらい人間の純粹な情熱になりうるものか、そしてそういう人たちがどの程度まで自覚的であるか、とそういったことを知りたいという気持がつよく動いたからであった。しかし機関の内実がうすうすわかってくるにつれて、伊能はしだいにそんな氣持をいだいてもしよせんはむだごとと近いということを知らされた。政治的世界においては、純粹な觀念の持主が決定的な役割を演ずることはほとんどありえないのだ。一週に二三度、短時間事務所に姿をあらわす主任委員の何大金は、異常な、ほとんど白璧質といっているほどに青白い、阿片吸引者か変態性欲じゃないかとおもわせるやせた男であったが、地下工作の大家であったという噂であった。この主任委員と、いつも彼につきそう秘書兼護身役らしい張愛玲という女性や、伊能の直接の上司の陳秋瑾という女性など、機関に出入りする人びとは、多かれ少なかれ血みどろな地下工作に終始した人びとであるといわれていたが、しかし、いずれもみなことなく底ふかく汚れた感じで、勝利による慰藉感など露もなく、この種の工作者獨特のぶきみな疲労ばかりが目立っていた。もちろん、対日抗戦の勝利などすでに問題ではなく、抗戦最中から彼らの全力が対共産党の内戦に注がれていたことは明らかであった。伊能は、そういう政治のもっとも残酷な機関に徴用されたからには、政治が人間そのものよりも明らかに巨大なものとして映る現代での生き方をそこで見いだそうと

でも言えはいえる気持を抱きはじめていたが、周囲のようすから漠然と察せられるものは、生き方とはむしろ反対のもの、殺され方ばかりであることを知り、故国へ帰ろうという望郷の念も、しだいに濁りだしていた。そんな環境で日を過しているうちに、海一つへだてた敗戦後の祖国は、相対立する大国の情報査察機関とその手先の網の目におおわれているかに見えてきて、帰国についてもいわずになれなくなっていたのだ。人ひとり舟一隻も自由に出られぬこまかい残酷な網が四つの島をがんじがらめにしているかと思うと、もはや彼などの居場所が日本のどこにもないような強迫観念にかられ、かつは敗戦によって根をたれたような気持がつよまってゆく一方だったので、彼は上海からもっと外へ、外へ外へと、二段も三段も論理を飛びこして自殺の場所をさがしでもするように地球の裏がわへゆく闇航路発見に努力を集中しだした。

委員会での伊能の仕事は、内外の新聞雑誌にあらわれた対日世論の調査であった。仕事が一週間分まると、金曜の午後ぶらりと出勤してくる咽喉のあたりに黒い小さな痣のある陳秋瑾という三十三歳の女子機関員に提出し、それについての感想を伊能には中国語よりもつごうのいい英語で報告するのであったが、陳女士は仕事にはまるで無関心で、伊能の報告もろくに聞かず、記録はばらばらとめくってみるだけにすぎた。ファイルに押しこみ、後は壁ぎわのソファに腰をおろして委員会内の動きを冷然と、しかし

人の出入りだけは鋭い視線をきりきりりと動かし、何かをさぐるように観察して夕方になると卒然と帰ってしまうのであった。世論調査などは文化運動委員会の看板にすぎないのだ。金曜ごとにそんなことをくりかえしているうちに伊能のほうでも嫌気がさしてき、かつは中国のあまりにも一方的な対日世論が不愉快でもあり、仕事をするのもバカらしくなってきた。「No report」何も報告することはありません、といって仕事はまったく放りだしてしまった。それでも陳女士は文句もいわず、また仕事と無関係な本を読んでも、そのころ内戦がしだいにはげしくなってきた。級機関員が事務所内に長時間いることもまれだったので、いっこう目立たなかった。

上海はカサブランカ、リスボン、アルジェなどとともに、いわゆる International Trash 国際的な人間のクズどもが、クズ相応の闇の大仕事を仕でかすに恰好な港であった。伊能はこの港の大倉庫群のあいだにある「血の雨横町」と呼ばれた一画にある、淫売屋をかねた酒場を一軒一夜ごととあさりあるいた。ありとあらゆる海洋国のことばで書かれた看板をさげた、それらの酒場は、船乗りの女あさり場であり、また密輸や人身売買・偽旅券などの市場でもあったのだ。

ある夜、伊能はそうした酒場の一軒で、陳秋瑾とばったり出あった。はじめ彼は自分の目をうたがったが、白人船員の気に入りそうな、はでな童などの模様のはいった旗袍

を着ているとはいえ、入口に近いソファに細い足を投げだして掛けていた女のつめたい流し目と咽喉のアザは、どう見てもやはり陳秋瑾のものであった。彼女は一瞬きらりと探照燈で照らしつけるような眼ざしを投げたが、無表情なまま、伊能のテーブルへ猫のように足音もなくやってきて、何と何との混血なのか、えたいの知れぬ女たちを追いはらった。目の前にだまって坐ると、彼女の背後にある委員会のナゾのような組織の網が急激にきりきりとしぼりあげられるような気がして伊能は鳥はだ立ったが、ちょうどその日の午後、目抜きの大通りで中共のスパイだという学生が後頭部にピストルを打ちこまれる残忍な光景を目撃したばかりだったことが逆作用して、真剣になっておのれの企図を洗いざらい低声で話した。ところが彼女は伊能の話に一見無関心なように黙々と聞き入り、新米の客があると入口の方をじろりとながめるばかりであった。伊能はあまりにも反応がないので拍子抜けしてようやく落ちつきを取りもどし、彼女の本務があの対日世論調査などではなくて、この酒場にこそあるのだ、そうならば危険な意図をいにく以上は、この危険な女を味方にする必要があると気づくまでに我にかえた。彼が話しおえると、陳秋瑾は張りのない胸部に疾患のありそうな顔の皮膚をゆるめて、

「You, dangerous……」

あぶない人ね、と針をふくんだような、重慶なまりと思われるアクセントのつよい英語を咽喉の奥でつぶやいた。

彼女はものうげに伊能のコップにビールをそそぐと、
「きょうはもうお帰りなさい。これからこの横町へ来るなら、この酒場以外へ行つてはいけませんよ、あぶないから。」

そう言つて手をさし出した。彼女の手は顔つきから想像した以上にあたたかく、彼を見送る視線は、会話中の無関心さとはうってかわった、微妙な、何らかの理解とあわれみとをふくんだ微笑に近いものがあつた。

彼女は伊能の企図については「あぶない人ね。」と言つただけで何の感想ももらさなかったが、伊能はそれ以後倉庫のあいだの横町へ行くことはやめてしまった。そこにもまた文化運動委員会は完璧の網をはって完全に遮断されてしまつていゝと思えなかつたのだ。彼は事務所へ行くこともおこたりがちになり、病氣だといつわつて何日も何日も天井をながめて暮した。

——とんだ文化運動だ！

とそう仰むけに寝てつぶやいてみると、戦争や革命がそれ自体平和であり世界であるような現代においては、このとんでもない文化運動こそ最も知的な、しかも最も行動的なものではないか、Intelligence service というゆえんか……と、そういつたゆがんだ感想すら浮かんで来て、絶望するために必要な情熱さえわかぬという暗いくぼみへおちこんでいった。

「とんだ文化機関だ！」

吐きだすようにもう一度声に出してつぶやいたとき、階段を上がってくる靴音が聞えた。かたい皮靴の音であった。彼の間借りした家の中国人老夫婦は皮靴をきらっていつも手製の布靴をはいていたのだ。やがて伊能の部屋の前で靴音はとまり、

「イーノ！」

という女の声がした。明らかに陳秋瑾の声であった。戸をあけるとあいさつもしないでつかつかと入ってきて手にもった小さなトランクを床に置き、

「臭い、臭い。」

と言いながら壁ぎわに身をよせ、片手で窓をあけて通りを鋭い目つきで眺めわたした。

目でちょっと合図をしてから彼女はもって来たトランクを寝台の下へ押しこみ、どうして例の酒場へも事務所へもやって来ないか、日本へ帰りたくなつたのだらう、病氣は懐郷病ではないか、などと質問したが、いずれにも伊能は答えなかった。然りと答えてみても否と答えてみてもどうなることがらでもないし、陳秋瑾の問いもさして答えを期待したものでないことは目色で明らかだった。話途中で彼女はふたたび寝台の下からトランクを引き出し、わざと中身を見せるようなぐあいにはひらいて底のほうからウィスキーの小ビンを取りだし、テーブルの上に置いた。トランクの中身は、あきらかに宝石箱と思われる小箱やハンケチにつつんだ貴金屬らしいものであった。

伊能はたてつづけにウィスキーを飲んだ。そしてビンが半分ほどになったころ、陳秋瑾はいくらか酒にうるんだような目つきで、

「伊能、あなたは中国共産党にだれか知った人がいるでしょう？」

とたずねた。伊能はいよいよはじまったぞ、と思ったが、たずねた陳女士そのものは冗談のように、にやにや笑っていた。

「さあ……」

と伊能は口ごもった。この答えがおかしかったか彼女はふつふつと老女のようなふくみ笑いをもらした。事実、戦中戦後にかけて、彼はさまざまな中国人その他と知り合いになったが、一体だれがどの党を信じどんな思想をいっているかなどということは容易にわかるものではなかった。一口話してすぐにいだいっている政治思想がわかるというような人は、真底からのテロリストかよほど平和で安全の保障された国の住民であろう。

「まずないと言うより仕方がありませんね。」

陳女士はふくみ笑いをこらえかねてか、いくらか声に出してまで笑い、笑いおえるとさっと立ちあがり、

「ときどき事務所へも出ていらっしゃい。」

と言って再見とも言わずに出て行った。トランクは寝台の下においたままであった。やがて彼女は三日に一回か四日に一回、時には夜中にもやって来てそのたびごとに一つ

か二つずつ鍵のかかった小型のトランクや書類カバンをおいていった。伊能は彼女のなすがままにほうっておいた。

それらの荷物が安全無害のものとはとうてい思えなかったが、しかし拒絶してみたところどうなるか。

ある日の午後、彼女が珍らしく手ぶらで——横に長い大きなハンドバッグにウイスキーの小ビンを入れただけでやって来たとき、伊能ははじめて彼女の仕事に立ちいった質問をしてみた。

「ええ、だけれどもそろそろ大詰めよ。このつぎはあなたの……番よ。」

あなたの……何の番なのか聞きとれなかったので聞き直すと、彼女は西洋人ふうに肩をすくめて笑っただけで何も言わなかったが、その態度はよほどうちとけていた。伊能と陳女士がウイスキーをなめザクスカをつまみながら交す会話は、政治にかんすることは両方とも注意深くきけて大部分は文学や美術にかんするものであった。そしてそれを話している限りは、その話題はいつか知らず知らずのうちに伊能と陳秋瑾という、恐ろしくかけはなれた存在をいくらかは一つの流れのうえにのせてくれるのであった。とはいえ、たまたま話が中国の現代文学にうつってゆき、林語堂について伊能が何か言ったとき彼女はふいに、

「That foreign Chinese!」

ふん、あの外国中国人め! と吐きすてるように言ったことが深く伊能の頭に残った。母国では生きられない、生

きるにたえない中国人、フォリン・チャイニーズというそのことばは、顎の細い、のっぺりした林語堂の面影をありありと描きだしていた。左右両翼からいれられず、ニューヨークの高級アパートに住んで、めったに帰国せぬ世界的文人林語堂の運命——そういったことを伊能が考えていると、陳秋瑾は吐きだすような今の調子とはまるで違った、低い声で、

「だけど、母国でだって、生きてゆくことは大変ですわ、今のような時代には。」

彼女は伊能の目をまともに見つめた。外国に脱出するという伊能の意図が、どのくらい真剣なものなのか、念を押すというような、何か迫るようなきつい視線であった。伊能は黙りつづけたあげく、

「しかし外国に出たからといって気楽なはずがない。」

と言うと秋瑾はすぐにうけて、

「今のあなたのようにね。しかし母国にいても外国にいるような気持で生きなければならぬ人もいます。」

広い額には油に光った簾髪（しだん）がそれこそ簾のように一本一本そろっていたが、切れ長い幾分つり上がった目には、しかし嘆きなど影もなく日本の女性にはめったに見られぬ鋭角的なものが光っていた。

Foreign Chinese と言われれば伊能の頭には Foreign Japanese という言葉がすぐに浮かび、それにつづいて何物か最も大切なもの——口に出して言えば祖国といった堅

いことばになるしかないような存在——にたいする *ゴッ*
*ゴッ*裏切りということばが、霧のように頭の中にたゆ
 たって去ろうとしなかった。伊能は目をあげて秋瑾の顔を
 見た。彼女が伊能と同じ物思いにふけっていたとは思われ
 ぬが、伊能の視線に出会ふと薄青い静脈の筋の浮かんだ眼
 をしずかにおろし、またしばらく沈黙がつづいた後で、ぼ
 つりぼつりと彼女がその母国にいらねえようになつたゆえ
 んの、身上話のようなものを語りだした。

「わたしは人を殺したことのある女です、直接手をくだし
 て殺したことはまだないにしても、結果としてわたしは殺
 したことにまちがいありません。もちろんわたしは、こん
 な××文化運動委員会などにはじめからいたのではありま
 せん。わたしの本職は、軍統——ご存じでしょうが、正式
 の名前は軍務委員会調査統計局で、抗戦中にできた黒衣社
 系の対日本および対共産党の特務工作機関です——その軍
 統の特務工作員、略して特工というあれです。

……どこからお話したらいいか、全くこの政治というも
 のは、頭も尻尾もなく、敵だ味方だといつてみたところ
 で、結局は敵味方が相対的に齒車のようにがっちり食いあ
 ったうえで、政治にとってただ一つ絶対に必要なもの、血
 と肉をもった人間をがりがり食って生きているのですから
 どこをどうといつて切りようもありませんが——そうでし
 た、わたしが特工になつたころ、日本はシンガポールを征
 服し比島を奪略し、南京には外見だけでもとにかく政府み

たいなものができるし、国共の合作はとくに破れ、特工
 も買収されたり同志で殺しあったりで悲観的な空気がただ
 よい、しだいに腐敗がひどくなつてゆきました。対日本、
 対共産党どころか、対内監視が特工の一番大きな仕事にな
 りかけていました。安全な人など一人もなく、連合軍
 勝利の見通しははっきりして来ても、こうした陰惨な
 空気はいっこうに改まりませんでした。」

陳女士がそこまで話したとき、「伊能さん。」と窓下で
 呼ぶ声がした。彼女は、つと立ってふたたび窓ぎわの壁に
 身を寄せ、

「あなたのところへ遊びに来る人があるのねえ。」とおど
 ろいたように言い、「ああ、あの賈さんだわ、ちよつと行
 っていらっしゃい。あなたが外へ出たらその後でわたしが
 出ます。そして今夜もう一度ここへ来ますから。」

伊能はしかしあまり行きたくなかった。というのは賈青
 年は伊能と机を並べて仕事をしていたのが、近ごろ辞職し
 て故郷の満洲へ帰ると言いだしていたのだが、彼の辞職の
 原因は、ほかならぬ伊能自身にあったのだ。事務所の会計
 係が職員給料をにぎって銀行利子をかせぐために、明日
 払う、明日払うといつて遷延しているの、下級職員が生
 活に困り、それでも文句も言えないでじつとがまんしてい
 るのを見かねた伊能が、これ以上悪くなりつこない捕虜同
 然な身の気やすさを利用して、賈青年と会計にむかつて面
 罵したことがあった。

『微用しながら給料も払わぬとは何事だ、こんな政府があるものか、こんなものは政府でも何でもない、どうぼうみたいなものだ。』

という意味のことをもっとひどいことばで言い、下級職員たちの窮状をもついでに言ってやったのである。会計はぬらりくらりと逃げたが、賈青年は負けた日本人伊能にこんな言われたことを深く恥じて辞職してしまったのであった。「満洲国」新京の師範学校から広島文理大へ留学した賈青年は日本人の気性をよく知っていた。

「お別れに來たんですよ。いよいよ近く発ちます。」

中国人インテリとしては珍らしく真黒に日焼けのした背の低い青年は、酒屋の細い腰掛けに腰をおろすと、白い清潔な齒をむきだしてそう言ったが、それにたいしても伊能は明瞭な返事ができなかった。彼の故郷の満洲は内戦の真最中で、それだけでなく日本側への協力者であつたらしい彼の家族などはどうなっているかわかったものではなかった。

「そう、それは……」

とまで言ううと賈青年はすぐにひきとって、

「東北（満洲）は大へんだ、とおっしゃるのでしょうか？」

それが大へんですが、僕はいい紹介状をもらいましたから大丈夫ですよ。」

「それならいいが。」

近ごろの伊能は、寝ていてもいつか自然に心臓の鼓動が

早くなるほどに、何らかの意味で政治に身をまかせ、どちらかを選ばねばならぬ人間というものの在り方が彼に底深い恐怖と感動を与えるのであった。

「その紹介状をだれにもらったと思いますか？　陳秋瑾女士からですよ。」

秋瑾は賈青年にとっても上司であつたが、いかに彼女でも今さら国民党系の人を紹介したとは思えなかった。

「それで……」

「それで、ある人に何度も会つてその人からまた紹介状をもらつたのです。」とまで言ううと賈青年は声を低めて、「東北人民政府の上のほうへね。」

「それはよかった。」

とは言ひはしたものの、伊能は腹の底からよかつたと思つたわけではなかつたので、ことばじりは知らずしらずにごつてしまった。青年は敏感に伊能の心中を察して、

「ですからこれ以上心配なさらないでください。ところで」と言つて彼はまた声を低めた。「來ていたのでしょ

う？　陳女士が？」

伊能がしずかに杯をあげると、

「あなた、ウイスキーの匂いがするからわかりましたよ。陳女士はウイスキーが好きですからね。いいんです、心配なさらないでください。あなたには言つてもいいと思いますが、僕はその、陳女士が紹介してくれた人、魏克典という中共の人ですが、この人から頼まれているのです。当分

陳女士の身のまわりをもそれとなく気をつけていて上げろって。陳女士が中共に内応しているという噂があるらしいんです。」

別れぎわに青年は伊能の手をしっかりと握って言った。

「僕はあなたに中国をののしられたおかげで別の中国へ行くふんぎりがつきました。またお会いできるかどうかかわかりませんが、あなたのことは忘れません。伊能さんも成功されるよう祈っています。」

別れて陳秋瑾の帰った後の屋根裏へもどっても、伊能は自分が一体どうすれば「成功」したことになるのか、全く見当がつかなかった。ともすれば目に見えぬ両方の陣営から同時に追及され審判されて自殺するのが「成功」と思えるような暗い淵のまわりをさまよっているおのれの姿が思えがかれた。買青年は伊能にののしられてふんぎりがついたという。これもまた考えてみれば恐ろしいことではないか。下級職員のためと思って、気楽な身分を利用して抗議しただけの、この小さな行為が、それだけが原因ではないにしてもすでに一つの波紋を起しているのである。買青年は選択したのだ。

長い夕照もようやく尽きて暮れかけた九時近く、陳女士の来るのがおそいので、夕食を取り出ると、途中タクシニに乗った陳秋瑾が呼びとめた。迎えに来たのだ、と言う。座席に坐るとすぐに、

「買さんは中共の魏克典という人の話をしたでしょう？」

その克典さんにこれから会いに行くのですよ。あなたを紹介するかたがた、ことがどの程度運んだかもたしかめに……」すべては簡抜けなのだ。そして好むと好まぬとにかかわらず、人は危険な人びとと結ばずには何事もできない。彼女は伊能のほうは見ずに暗い通りをまっすぐに見つめてひとりごとのように話した。

「この魏克典という人には、ひどい目にあわされました。いまでもときどきいじめられています。」しかし彼女の声にはいっこうに憎しみの調子はなかった。むしろいじめられることを楽しんでいったようさえあった。「この克典さんは、わたしたちの学生時代の友人だったのです。あのころわたしたちは抗日救国学生運動を組織し、克典さんはその秘書長でした。わたしたち、いえ、わたしたちわたしたちと申して来ましたが、そのころわたしには黄という愛人があって、この人と同棲して二人とも工人会のオルグとして労働者獲得のために努力していました。わたしにもこんな時期があったのです、もちろん共産党系の運動でした。それが後日、突然政府の弾圧をくって、克典も愛人の黄もわたしもみな逮捕されてしまいました。一時はどうなることか、と心配しましたが、さいわい克典さんの親御が運動してくださり、三人とも一応転向ということにして出してもらいました。今になって考えれば、克典さんも、もちろん黄もいわゆる偽装転向にすぎなかったのです。出獄してすぐ克典さんは女学校でわたしと同窓の小黛という

金持のはねっかえり娘と結婚し、運動とは一切手を切ってしまったように見えました。そして黄は出獄するとすぐ、一時行方不明になりましたが、ある晩ぶらりと帰って来ました。そのときはもう、わたしは国民政府が合法的な政府である以上、そしてそれが抗日が一切に優先すると宣言している以上は、共産党と手を切って戦うのが正しい。抗日の道に二つはないはずだ、と決心してしまっていました。わたしは単純な女なのです。ところが黄は頭ごなしにそんなわたしをどなりつけたものです。どなられてわたしもかっとなって言いました。

——だってあなたも転向を誓ったじゃありませんか。」

——あんなやつらに何を誓ったところが誓ったことなんかになるものか！」

と、こういう戦法で反撃して来ました。

それでわたしと黄の仲もおしまいです。わかれてしまいました。いよいよわかるるとき、妙に不自然に胸を張って黄はこんなことを言いました。

——抗日なんぞはわかりきったことだ。しかし現代のよな時代では、右翼であるか左翼であるか、とにかく立場の鮮明でない人間、中間的な第三者などは人間ではない。もちろん中間的な人間のほうが大多数だが、これをひきいて立場を鮮明にさせるのが、彼らを人間にするみちなのだ。君のように脱落してゆくやつなどは、最も唾棄すべき、敵だ……」

そこまで一気に言くと、いくぶん声をおとして、

——しかしまあ、僕らにも共通の理想にもえた日々のあったことだけは、おたがい忘れぬようにしよう。」

それから長いあいだ、長い長いあいだ克典夫妻の消息ももちろん黄の行方もわかりませんでした。何でも黄は延安に、克典夫妻は重慶にいるということは風の便りに聞きましたが……」

運転手は車の輻輳する通りへ乗り入れ、警笛だけではたらぬと見えてウエーウエーという動物的な掛声をかけていたが、ときどき、絶えまなく英語でしゃべりつづけている奇怪な中国人、この男と女は何者なのだろう、とでもいうふうになりかえて見た。陳女士はユダヤ人の宝石店の前まで来ると車を止め、すたすたと店に入って二、三分して出てきた。車へもどって来たときの彼女は、さっきの回想にふけるといった表情を拭うように去って、車台に足をかけるときも鋭く左右を見まわした。車が動きだしてからまたしばらく沈黙がつづいた。

「黄……そう、愛人の黄とわかれてからのわたしは、身の平均をうしななって暗い地獄へ一直線です。わかれた直後、Zという、今思っただけでもぞっとするような男が現われて、中華全国で一番働きがいのある仕事についたらどうだと言ってくれたのです。それがこの特工の仕事でした。この世界は入ったらもう出られません。出口なしです。ものがけはもがくほど深くはまりこんでゆくだけで、仕事も仕事

なら、しまいに重慶でこのZという男と結婚するほどにさえなっていました。もちろんすぐに別れましたが、その当時からわたしの直属上官が今の文化運動委員会主任委員の何大金なのです。特工というものは、死ぬまで転勤ということがありません、たとえ部署が変わっても。つかまったらもう一生です。——Zとの生活から逃れるために上海での任務をもらって奥地を離れました。上海へ来て、中共、国民政府、南京偽政府、日本軍との四つが、だれにしても決してたどり切れないほどにもつれあった網の結び目にいる要人を一人一人狙^{ねら}いうちする工作に、もう全身、うちこみました。ときどき黄や克典のことが思いだされると、わたしは彼らを裏切っているのではないかという、胸を突きさされるような苦痛を覚えました。この苦痛からまぬがれるためにも、緊張して工作にはげんだものでした。中共のアクティヴな人は別として、国民政府側にしても南京偽政府にしても、また軍人以外の日本人にしても、これらの重要な結び目にいた有能な人は、ほとんど全部といていくらい、左翼からの転向者でした。そしてそれをになう特工もまた勤勉で忠実な人は、これまたたいていは転向者でした。転向者というものはどうやら必然的に元来のものの敵になる運命にあるようですね。そうした要人の何人かを、ワナにかけて狙^{ねら}いうちしました。何のために、などとあなたは問いもなさいますまいが、やがて手ひどい、痛烈な復讐がやって来しました。それでなかったら、伊能、あ

なたと一しょに車に乗るなんということもありえなかったでしょうから。

ちようど、あなたとあの酒場でばったりぶつかったように、抗戦末期のある日、G書店にゆくところ例の克典に会ってしまったのです。このG書店というのは、日本軍占領下の上海でたった一軒、店の奥に非占領地区で出版された本や雑誌を秘密裡に置いてある店でした。がんらい、本や雑誌は十把^{じふ}一からげに左翼的なものと見なすという方針でしたから、このG書店も日本憲兵と競争でわたしたちの監視下にあったのです。ところがばったり顔をあわせても、克典は知らぬ顔をしているのです。もちろんわたしも知らぬ顔。そのうち克典のほうが出ました。やはり以前のようになしびっこをひいています。わたしは斜行型をとって尾行しはじめました。克典は十分くらいは尾行されていることを全く気づかぬようでした。物珍らしそうに右を見、左を見て歩いてゆくのです。それでわたしは克典がつい近ごろ奥地から上海へ下って来たのだな、と感じはしたものの、人違いじゃないか、などという疑念もわきました。ところが、ある曲角まで来るとふいに見えなくなり、わたしがあわてて人込みの中へとびこんで、まごまごしていると、うしろからぼんと肩を叩かれました。やはり克典です。にやにや笑ってさえました。これは相当な訓練をつんでいるな、と直感しましたが、わたしもそんなことはけぶりにも見せず、大仰な表情をつくって、